（５）令和４年度「課題研究」に向けた第１学年の取組について

＜目的＞

第２学年より実施する「課題研究」の実施に向けて、「課題研究」とはどのような活動であるのかを理解させ、次年度につなげていくことが大切である。日々の生活や各教科・科目の授業内容の中から生まれる疑問、身の回りや世の中で起こっていることにしっかりと目を向け、日常を意識的に生きることで、様々な課題に気づくことができる。その気づきが、次年度の研究テーマのヒントとなる。当たり前を当たり前とせず、様々な「ものの見方や考え方」を身に付け、思考する力を育成する。

＜内容＞

今年度に実施した取組内容は、下表に示したとおりである。なお、表中に番号(①～⑧)を付したものについて、後に説明を記す。

	月日	内　　容	生徒の取組
	４月当初	新入生オリエンテーション 「課題研究」」について	
①	５月１９日	LHR ガイダンス「課題研究とは」 『課題研究メソッド』(啓林館　岡本尚也 著) 配布 「気づきノート」について	ワークショップ テキストを用いて学習 「気づきノート」記入
②	６月３０日	LHR「探究」オンライン講演会 GPI　US 教育アドバイザー　木本 健太郎 氏	講演会受講
③	７月末	夏期休業中の課題「課題研究へのアプローチ」資料配付、説明	「課題研究へのアプローチ」のテーマについて考える
	夏期休業		課題の実施
	９月１３日	上記課題の回収	
④	２学期間	情報の科学の授業で「メディアリテラシー」を中心に据えた内容を展開	
	１０月初旬	課題を返却し、クラス内交流会について説明	クラス内交流会へ向け、発表準備
⑤	１０月１３日	LHR「課題研究へのアプローチ」クラス内交流会 ブラッシュアップ指示	グループで発表
	１０月中旬		課題のブラッシュアップ
⑥	１１月１日	課題および「振り返りシート」を回収	ブラッシュアップ後の課題および「振り返りシート」提出
	１１月２６日まで	課題点検 点検後、教室で自由に閲覧できるようにする	クラスの仲間の研究内容を知る
⑦	１２月１日	LHR「課題研究」実践に向けた「畝傍高校 出前講座」	出前講座受講
	冬期休業		「気づきノート」記入
⑧	１月１２日	LHR　学年集会 「来年度の課題研究へむけて」	来年度のテーマについて考え始める
	１月１４日	テーマ調査用紙配布	
	１月２８日	テーマ調査用紙回収	
	２月１６日	LHR　来年度へ向けて	

① LHR ガイダンス「課題研究とは」

時間の最初に「新聞というものの使い道をたくさん考える」というテーマでブレインストーミングを実施した。目的は、「ものの見方や考え方」は人それぞれであり、先入観を捨て、頭を柔らかくすることが課題研究において大切であることに気づかせるところにあったが、非常に盛り上がり、時間を超過するクラスもあった。その後、『課題研究メソッド』(啓林館　岡本尚也 著) を配布し、それを用いて課題研究とはどのようなものであるのかということを説明した。また、「気づきノート」を準備させ、記入の仕方について説明した後、こちらで用意しておいた新聞記事を用いて、実際に記入する練習を行った。

② LHR「探究」オンライン講演会

GPI US 教育アドバイザーの木本 健太郎先生を講師としてオンライン講演会を実施した。新型コロ

ナウイルスの感染拡大により、生徒は各 HR 教室での受講となった。課題研究を行なうにあたって、「既成概念にとらわれないこと」「世の中の出来事に常にアンテナを張っていること」等の話があった。例えば、「碁盤目状に並ぶ９つの点を一筆書きでつなぐにはどうしたらよい？」の問いが木本先生から投げかけられた。既成概念にとらわれているとなかなか解けないが、視点を少し変えることで解答できる生徒もいた。

＜生徒の感想＞

○私が本当にやりたいことが何か、「ikigai」が何か、すごく気になった。まだ見つけていない自分の将来図を見つけて、「これだ」と思えるようなことを世界に役立てられたらいいと思った。

○何かを探究するというのは、はっきりしなくて何をしていいかよくわからなかったが、お話を聞いて答えのある問題を解くのは学生のときだけで、社会人になると答えのない問題ばかり解くことになると考えると、少し探究することを楽に考えられるようになった。

○人生には好奇心が必要だと思った。何かを追い求めるのはとてもいいことだと思う。しかし、人生経験が積み重なっていくなかで、だんだん好奇心が薄れてきている気がする。なので、好奇心を忘れないために、まず疑問を持つことから始めてみようと思った。

○私は、課題研究のテーマをどのように見つければよいか講演前まではわかりませんでした。しかし、講演で Society 5.0 のことや問いは自分で作り、見つけるものだということを聞いた後から、課題研究に対して抱いていた堅苦しいイメージが消えて、身のまわりのちょっとした疑問をテーマにしていこうと思うことができました。

③　夏期休業中の課題「課題研究へのアプローチ」

夏期休業中の課題として、第１学年生徒全員に「課題研究へのアプローチ」を課し、次年度の実践に向けての準備段階の一つとして取り組ませた。その内容は、①課題の設定、②課題設定の理由、③課題への迫り方、④迫ってみて分かったこと、考えられること、⑥迫ってみたが分からなかったこと、引き続き考え続けたいこと、⑦参考にした新聞記事、書籍、web ページの７つであり、以上の内容を B4 １枚のレポートにまとめさせた。「課題研究」の意義や身につけて欲しい力を説明した上で、日々の気づきや、新聞記事、また夏期休業中に出される各教科・科目からの課題とも結び付け、研究課題を設定させ、記入の際には、事実と意見を分けて記入すること、考察を行うこと、出典を明らかにすることの３点に注意するよう指導した。また、研究課題は「問い(リサーチクエスチョン)」の形で設定させるようにし、疑問を持ちながら情報に触れる習慣を意識させた。

④「情報の科学」の授業でメディアリテラシーを中心に据えた内容を展開

前出の③「課題研究へのアプローチ」を１年生全員の夏期休業中の課題として与えたところ、課題研究の意義や目的を理解し、次年度の課題研究につながるような課題への迫り方ができた生徒もいるが、迫り方に改善点が見いだされる生徒や、課題研究と調べ学習の違いがわからないまま調べ学習をやって課題を提出した生徒もいた。

また、情報の取得源として図書や新聞などの紙媒体ではなく、インターネットで検索した情報をそのままもってきて「課題研究へのアプローチ」に写しただけと思われるような調べ学習作品も散見された。そこで、来年度の課題研究において「研究テーマ選び」や「信憑性の高い情報の取得」が出来るようになることを目的として、「情報の科学」の２学期の授業でメディアリテラシーを中心に据えた授業展開を行った。生徒にとって最も身近なメディアはスマホであり、SNS や YouTube を生活と密着させて、家族間・友人間のコミュニケーションや部活動・塾・学校の連絡に多用している。しかし、個人情報の漏洩や提供には無頓着な場合が多く、危険性の認識も低い。そこで、メディアリテラシーの入門として、『その情報はどこから？―ネット時代の情報選別力―』(ちくまプリマー新書　猪谷千香 著)、『その情報、本当ですか？―ネット時代のニュースの読み解き方―』(岩波ジュニア新書　塚田祐之 著）の２冊を教材とし、いくつかの文章を読ませ、解説を加えながら考えたことや感想をまとめさせた。どちらの本もネット掲示板や SNS、新聞に掲載された記事や事件や話題をとりあげ、フェイクニュースを受けとった人々が巻き込まれた事件や騒動をわかりやすく解説し、各メディアの性質をふまえて信憑性の高い情報を取得する意味合いについて触れている。この後の授業で、「情報検索の仕方」や「ネットワークの仕組み」、「情報の発信」を指導し、考査等で評価した。生徒の授業に対する取組も上々で、ネ

ット上に散らばる情報の信憑性の低さや生徒たちが抱えるメディアリテラシーの課題にも触れたことで、情報を取得するときに注意すべき点や真偽の確かめ方にまで踏み込むことができ、来年度の課題研究にも役立つ内容だったと考えられる。

⑤「課題研究へのアプローチ」クラス内交流会

各クラス 5 名～6 名程度のグループを作り、一人あたり 5 分前後の持ち時間(質疑応答を含む)で発表を行った。質問は口頭で行うと共に付箋にも記入させて貼り付けさせ、後のブラッシュアップに役立てられているか、こちらで確認できるようにした。級友から違った視点での意見を貰うことで、各自の課題を客観的に捉える機会をもつことができたと考える。生徒にとっては、初めての経験であったが、和やかな雰囲気で実施できていた。

⑥「課題研究へのアプローチ」クラス内交流会振り返りシート

交流会後、受けた質問等をもとに課題をブラッシュアップさせ提出させた。それを教員で点検し、アドバイス等を記入して返却した。その後「振り返りシート」を記入させた。「課題研究へのアプローチ」に取り組んできた過程（テーマを考え出した時から今日まで）を振り返らせた。振り返りを行うことで、研究対象はもちろんのこと、取り組んだ内容を「自分事」と認識できるようになる。そうすることで自分が本当に知りたいことが見え、次年度のテーマ設定につなぐことができたと考える。

⑦　LHR　「課題研究」実践に向けた「外部講師先生による畝傍高校　出前講座」

生徒たちが日常のあらゆる場面における「ものの見方・考え方」について学び、次年度の「課題研究」実践およびその先のキャリア設計に向けた意識づけの機会とするため、有識者および行政機関、地域で活躍されている方々からお話をしていただいた。「畝傍高校　出前講座」と名付け、次項の表のように 10 の講座を用意し、生徒は希望講座を選んで受講した。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、学年を２つに分け、５限と６限に実施した。

＜生徒の感想＞

○暗記をすることに対して苦手意識をもっていたけれど、この講座を受講してその意識が少し薄れた。「理解なしの暗記」は難しく、学ぶことは発見学習であることをスワヒリ語の演習を通して知ることができた。日本語を勉強することで、ものの見方・考え方を学ぶことができ、自分を見る力の回路を太くすることが大事だとわかった

○この講座を受講して、多文化について学ぶことは、自分の行動範囲を広げることができたり、他人の意見を否定せずに尊重したり、いろんな見方ができるようになることにつながると思った。

○この講座を通して、持続可能な観光とはどういうものかがよく理解できた。私は今まで観光は楽しいものとしか思っていなかったが、観光があることで平和と安全、雇用、環境保護などにつながっていくと聞き、大切な役割を担っているとわかった。

○普段何気なく読んでいる雑誌にもたくさんのアイディアが詰まっているのだと改めて思った。同じ内容・写真でもレイアウトや字体によって印象がガラリと変わった。

○自分の弱みを強みにして生かすということが一番印象に残りました。短所だと思っていたところも意外と自分の長所なのかもしれないと自信を持つことができるようになりました。

○ビジネスは日常の課題を見つけて、それを解決しようとすることで生まれることがわかった。その課題は自分だけの課題ではなく、多くの人にとっての課題であることがよいビジネスを生むための条件であることもわかった。自分も身近な生活にアンテナを張っていきたい。

○昔の人の常識にとらわれない発想や諦めずに続けていく心は、きっとこれからの大切になってくると思うので、私もチャレンジ精神を持っていきたいと強く思った。

○１つの失敗から、社会課題の解決につなげようとする行動がすごいと思った。目の前の課題解決だけが解決手段だと思っていたが、課題の前提から解決することも手段の１つだという考え方を知ることができた。自分も日常生活で気になることがあれば、それに注目してみたいと思った。

○普段の生活で「森」を意識することはありませんでしたが、講座を受けて、私たちの生活は森によって豊かになっているとわかった。先祖の植えた木をどのように使うか決めるのは僕たちの世代だと知って、改めて考えないといけないと思った。

○伝統を次世代へつなぐためには、まずその伝統を知らなければならない。そしてそれを伝えること

が必要だ。「物」を通じてだけでなく、空間を通して、講演を通してなど、伝え方は何通りもある。講師の先生の会社は、文化をつなぐことと経済をリンクさせて、より豊かな社会を目指すことをコンセプトに活動されていることを知った。文化と経済は全く別物のように思っていたので意外だった。

講師　（所属等）	テーマ	探究のポイント
加藤　久雄　様（奈良教育大学学長）	暗記ではない国文法の話	なぜ、私たちは国文法を学ぶのでしょうか。
アダルシュ・シャルマ　様 （NPO ナラ・ファミリー＆フレンド代表）	Multicultural Coexistence	Is Japan a multicultural society?
夏秋　智行　様・ 西原　康平　様 （UNWTO（国連世界観光機関）駐日事務所）	持続可能な観光	「持続可能性（サステイナビリティ）」という言葉を聞いてどのようなことが思い浮かびますか？
川北　真也　様 （橿原市役所魅力創造部観光政策課） 根ケ山　様・中本　様・中川　様 （同企画部広報広聴課）	魅せる広報誌づくり	届けたいことを伝えるには？
木谷　一登　様（木谷ワイン代表）	史上初の純奈良県産ワイン誕生！　畝高卒業生の苦難と成功(？)ヒストリー	汝は自らの弱みを活かせるか？
石原　達志　様 （日本政策金融公庫　西日本営業所所長）	新たなビジネスが生まれる瞬間	売れるビジネスの共通点とは？
北川　宏　様（京都大学大学院理学研究科教授）	現代の錬金術（多元素ナノ合金が切り拓く　グリーンイノベーション）	元素を混ぜて新しい元素を創れるか？
菊池　信孝　様 （NPO 法人インターナショクナル代表）	ピクトグラムで社会課題を解決する	みなさんにも世界共通言語はつくれるか？
森本　達郎　様　（森庄銘木産業株式会社専務）	森と暮らしを繋ぐ	SDGs×林業の関係って何だろう？
高橋　すみれ　様 （株式会社「和える」マーケティング　統括部長）	日本の伝統（産業）	あなたは日本の伝統（産業）を次世代につなぎたいですか？つなぎたくないですか？

⑧　LHR　学年集会「来年度の課題研究へむけて」

学年集会において、次年度の課題研究へむけて、テーマを考えていくことについて話しをした。当たり前だと思っていたことを疑うことが、テーマ選択のスタートであり、しっかりと考える姿勢をもつように話しをした。各教科の授業の中で感じた疑問をヒントにすること、興味・関心があることの中から探すこと、調べたらすぐに答えが出るものは適さないという点も留意するよう伝えた。また、自然科学分野のテーマについて、本校生のテーマを紹介し、テーマ選択のヒントとなるようにした。

＜成果と課題＞

１年生の取組として３年目を迎えた。「気づきノート」から始めさせることは例年と同じだが、練習を兼ねて、HR で一斉に記入させる形でスタートした。時間的に厳しいものはあったが、「気づきノート」についての理解は深まったのではないかと考える。６月と１２月には外部講師のお力をお借りして、探究学習の概念や考え方を生徒たちに伝えることができた。生徒の感想から、課題研究に対するとらえ方が変化したことが伺えた。講演を受けて生徒それぞれが感じたことを生徒同士で共有するなどの振り返りの時間がとることができればなおよかったと考える。年間の HR の時間は限られており捻出するのは容易ではないが、各学期にせめてもう１時間ずつ探究への理解を深める時間が必要ではないかと考える。